
走り書き

乾燥用

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走り書き

【Zマーク】

Z6809P

【作者名】

乾燥用

【あらすじ】

800字ぐらいで小物を作れないとと思案してみた結果がこれ。大分砕けた書き方をしてみたいので、というのも書く理由の一つ。連載の体を為してはいるものの実際は短編。
基本的に推敲、筋など考えていないのでえらい」となっています。

弁当

先日まで病院でずっと飯を食っていた。で、出てくる飯と言うのは仕出しの弁当なのだ。

その仕出しの弁当、といつのは朝、昼、晩三食、若干の内容の差はあるものの、いわゆる幕の内弁当よりも、若干品のいい弁当が出てくる。

煮しめがつぐ、卵焼きがつぐ、酢の物がつぐ、何やらグラタン風の物もつぐ、たまにはちょこちょこから揚げ風の物もつぐ。そして、それのおかずを冷や飯と共にかつ食らう。

多分、誰もがそれなりに美味しいと思う味付けなのかもしない。しかし、私はこの弁当と言う奴が子供の時から嫌いだ。子供の時は本当に喉に通らなかつた。吐いてしまつたほどだ。

確かに今でこそ私も弁当は食つ。弁当しか日の前になければ勿論食べる。別に嫌いだからと言つて駄々をこねて投げ捨てたりはしない。だが喉にすんなりと通らないのもまた事実だ。

何故嫌いか、と言えば、実家暮らしで温かい飯を日々食らつている身として、慣れていないというのも勿論あるが、それ以上に弁当とは孤独の象徴なのだ。

孤独の象徴、というのは何も幼少時、遠足にでも行つた時に集団に入りきれずに一人で弁当を食らつた、という背景を意味しているのではない。とか言いつつ、そういう記憶があるようなないような……。

話を折つた。そうではなく、弁当といつものそれ 자체が孤独の象徴だと思うのだ。あれほど放つて置かれている、といつ氣がするものも中々ない。

そりや勿論、誰かが愛情を持って作つたのかもしれない。しかし、飯は冷たいのだ。温かみが時間と共に風化してどこかへ去つて行つてしまつたのだと、幼少時、何故喉に通らなかつたのは、この年に

なれば、そう思える。

言つなれば、弁当は間接的な愛情表現なんだらう。作つてゐる瞬間の愛情を想像しなければ、ただの冷たい飯だ。子供の時にそんな表現では伝わりづらい。

じへ稀に見かける子供が冷たい白米をぼそぼそ食つ様は、寂しい。

弁当（後書き）

822字。

もつひとつと上手く前半まとめられないものかとも思つた。
繋ぎも大分弱い。

オチはこういう形になつたが、本来はこう書くつもりだつた。
「温かい飯の旨さ、本当の飯の旨さを知つている」
今見るとこれもどうなんだと思わなくもないが。

犬

犬を見て泣いた。小学三年生頃のだったと思う。犬を見て泣いた、と言つても何も可愛らしい犬の轢死体を見て悲しみが押し寄せたとか、そういう話ではない。気持ちが昂ぶつていた時、犬を見て、泣いたのだ。

もう十年前の話なので、私がどんなことを思つて昂ぶつていたのかは定かではないが、犬の考えもなく、好きなように吼え、小便し、糞を垂れて、走り回つてる様を見て泣いた。

そして大体こんなことを考えた。

何で犬の方が自由に走り回つているのだろう。どうして自分はこうもウジウジと悩んでいるのだろう。私は犬になりたい。こんな風に自由気ままに、生きて行く方が余程立派じゃないか、と。

今考えれば大分浅はかで、こいつは頭をどこかに打つたのかもしれないと思わなくもない。思わなくもないが、そんな下らないことに純粹に思い巡らせていたのだから、尊敬できる部分がないこともない。

今こんなことを思うことはない。ある意味成熟したのかもしれない。しかし、どこか欠落していつている気がする。

少なくとも年々思考することは減つていつてている。私は喫煙者だから煙草の成分が脳のシナプスを何かを破壊して、どんどん頭が狂つていつているのかもしれない。

年をとるにつれて高望みはしなくなつた。物欲も減つた。ただただ飯を食つて、寝て、煙草を吸つてこんな下らないことを書いている。

そう考えれば、子供の頃から一周して私は犬になつた。犬のように好きなように生きて、犬のように、考えなしに生きている。子供の頃と比較すれば悩むことは減つた気がする。

だが、犬の辛さを知つた。犬の空しさを知つた。子供の頃の方が

余程人らしかつた。うじうじしている方がよほど人間らしい。感情を持つて何かしらしようとして、必死にもがいているのだから。さあ、私は成長しているのだろうか、退化しているのだろうか。案外、何も変わっていないのかもしれない。

犬（後書き）

792字。

大分よくなつたような氣もするが、今度は随分硬くなつた。
こちらが本性だから仕方ないものの、もうちょいマシにならないものかと思う。

オチ弱は留まるところをしらんなーと思つ。
まともなオチつてそもそもなんだ、とも思つが。

病院にて

腰の痛みがひどくて何日か入院することになった。不摂生が祟ったか、運動不足が祟ったかはわからないが、現に痛いものだから、仕方なく病院に行つてみたところ、そのまま入院する運びとなつた。私は今まで入院などしたことがない。私は極めて健康な人間でもないが、極めて不健康な人間でもなかつたから、医者にかかることさえそもそも少ない方であった。しかし、現に入院していることを思えば騙し騙しの生活だつたのかもしれないと考えた。

また近い将来こんなことがあるのかもしかないと考えた。院したところで、とも思った。こんな考えを持つから入院などするのだろうとも思つたが。

そういうわけで、入院などしたことなど今まで一度もしたこともない私だから、入院する一週間の着替えだけを持つて出かける時の心意気は随分気楽なものだつた。

結局のところ、腰痛を治す以上の意義を入院に見出そうとしたら、これで色々と休む都合がついたと思うしかないと考えたものだから、その気軽さがわかつていただけるものかと思う。大分無邪気なものだつたと、今になればそう思わざるを得ない。

それで病院について、病室に案内されて、病院内の服を渡されて、家から持つてきた着替えを病室に置いて、そして渡された服に着替えた。流れ作業であつた。こうして簡単に病人が一人出来上がりてしまうのだから何だか情けなくなる。自負であるとか、気概であるとか、所信表明であるとか、そういうことを私は尋ねられることなく、こうして私は一人の病人となつた。

実際、私は病人で、入院する前にそう診察もされたはずなのだが、私の意志に反して病人にさせられたという感じが沸いてくる。何故だろうか。

その後は血を抜いたり、薬を飲んだり色々あつて一日目が終わつ

た。夕方から病室に入ったものだから案外時間の進みが早かつた。別に何を考えるまもなく眠りについた。

一日目になつた。腰を痛めている私は絶対安静を医者に突きつけられ動くことを禁じられた。ここからが問題である。まず思ったことは軟禁という単語である。動かないのではなく、動けない。

山椒魚を思った。どうすべきかと思つた。どうかしてやろう、そういうする考えは持つてゐる、だが実際は何も策などはない。その状況に酷似していると思つた。

山椒魚と違つて、既に私に至つてはどうしようもないことを悟つていたものだから、どうもこうもなかつた。ただただ軟禁という単語が脳の中に垂れ流しで現れるだけである。

病院でたつた一日、ぼんやり過ごしただけなのだが、いついつ日々が軟禁かとこう考へた。軟禁という日常では想像しがたい単語の実態はこうこうものなのだと肌身で実感すると、次に、ぼんやりと刑務所で過ごす日々はどれほどのものかと、こう考へた。

一週間後の未来、軟禁状態のわが未来、こう考へるだけでも屈せし思いがする。半年、一年、三年、五年、時には十年、二十年とそんな長い時間を狭い刑務所内で日々暮らすことを思つと刑務所とは、日頃、ぼんやりと思つてゐる以上に刑務所なかもしれんと、こう思う。

病院にて（後書き）

1283字。

大分前に書いたが、お蔵入りももつたいなくて上げた次第。
その為800字の制限も吹っ飛んで、内容もいつも以上に尻切れ蜻
蛉になつた。
よからうて。

逃亡者

ガタンゴトンと列車は揺れていた。やけに振動が酷いので、数秒毎に体が少し動く。私はその揺れに合わせて、少し体と首を捻つて周りを見渡す。周りを気にしているという行為を周りに悟られないように動く。その行為は自分が犯罪者だと思いたくない気持ちに反して、自分を犯罪者だとラベル付けする行為だと言う事に気付くまで続けられた。ただ、気付いた後も何となく他人から見られている気配が不思議と付き纏う。不安な気持ちに終わりは無いが、既に乗つてしまつた列車であるから何か起きてても逃げ場が無い。そこまで考えが至つた時、私は開きなおつてじつと横座席に座つていることに決めた。そして、いざとなれば、列車から飛び降りてでも逃げてやるという算段の覚悟だけを決めた。

そのように色々考えている内に列車は目的の駅の二つ前の駅に到着した。窓から見える景色は晴天で、列車を待つていた人々が荷物を抱えて、乗車する準備を整えていた。昼間の田舎駅のために、それほど乗車する人はいない。私が一番気にしていた警官も、駅には見当たらなかつた。この列車に乗つて既に三十分ほど経つ。もし、乗車する際に駅員が私のことを気づいたのならば、そろそろ警官が駅で待つていてもおかしくはないと覚悟を決めていただけに、安堵の溜息が小さく漏れた。溜息をついた瞬間、やはり自分のことを犯罪者だと感じていることを悟つて、また小さく溜息をついた。

窓を眺めていたら、車掌が発車の笛の音を響かせた。私はその音を聞いて目線を窓から外して少し俯いた時、突然「こちらは空いていますか?」と背後の方から声をかけられた。思わず驚いて少し腰を上げながら振り返ると、この駅で乗車したであろうブラウス姿の婦人が立つていた。少し眉を上げて、私の前の空席に座ろうとしていた。私は動搖を隠そとができるだけ自然に「どうぞ」と答えた。しかし、声は少し上ずつていた。婦人は小さな会釈をした後、買ひ

物後であろう野菜が詰まつた袋を隣に置いて、紺のスカートの皺を
気にしながら私の前に座つた。

私は少し俯いて、スカートの皺を気にしている婦人の姿を上目で
覗き込むように盗み見た。婦人の表情は私のことを知つてゐる様子
には見受けられなかつた。

スカートを整えた婦人は「すみません、驚かせてしまいまして」
と婦人は馬鹿みたいに丁寧に声をかけてきた。

「いえ、お気になさらずに」と私は流暢に答えるながらも、その丁寧
さに若干の訝しさを感じた。もしかすると、単純におしゃべり好き
なのかも知れない、しかし…とその後に続く言葉を私は飲み込んだ。

逃亡者（後書き）

1060字ほど。

これは半年以上前に書いて、やはりもったいなくて上げたもの。
評価は前回と変わらず。

加えて言えば、つかず離れずの書き方は未だ健在。
まさに駄作。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6809p/>

走り書き

2011年1月2日15時55分発行